

世界批評大系  
6

# 世界批評大系 6

詩論の現在

筑摩書房

世界批評大系 6 詩論の現在

一九七四年十月二十日初版第一刷発行

1398-28006-4604

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

三〇東京都千代田区神田小川町二八

電話二九一七六五一

振替東京四二二三

井村印刷／明和印刷 和田製本

# 第六卷目次

マリナー・ツヴェターエフ 工藤正広訳

光の驟雨

ユーリイ・トワイニャーノフ 新谷敏三郎訳

フレーブニコフについて

\*

L・C・ナイト 中野里皓史訳

マクベス夫人には何人の子供がいたか？

R・P・ブラックマー 金関寿夫訳

マリアン・ムアーの方法

ジョン・クロウ・ランサム 御興員三訳

ソネット作者としてのシェイクスピア

ロバート・ベン・ウォレン 高松雄一訳

純粹で不純な詩

J・ドーヴァー・ウィルソン 喜志哲雄訳

放埒と放蕩王子

W・H・オーデン 土岐恒二訳

範としてのイエイツ

ケネス・バーク 松下千吉訳

キーツの一頌歌における象徴的行為

アレン・テイト 中川敏訳

ロンギノスと「新批評」

レオ・シュビッツァー 沢崎順之助訳

エクスタシーの詩三篇

ウィリアム・エンブソン 高橋康也訳

宇宙飛行士ダン

\*

イヨールゴス・セフェリス 出淵博訳

『詩章』

ジュゼッペ・ウンガレッティ 河島英昭訳

レオパルディ論

\*

ハンス・エゴン・ホルトフーゼン 永野藤夫訳

晩年のリルケ

ヴォルフガング・カイザー 小堀桂一郎訳

詩の様式規定

エーミール・シュタイガー 高安国世訳

夜ふけの船

ヴェルナー・クラフト 高本研一訳

雲

396

370

347

319

287

281

230

192

176

テ・オド・ア・W・アドルノ 円子修平訳  
ルードルフ・ボルヒャルト

\*

ジャン・ポーラン 荒木亨訳

野性状態における修辭家、ポール・ヴァレリー

ジョルジュ・ブーレ 松室三郎訳

マラルメの空間と時間

イヴ・ボヌフォワ 阿部良雄訳

詩の行為と場所

モーリス・フランシヨ 栗津則雄訳

来るべき書物

\*

解説 菅野昭正

世界批評大系 6 詩論の現在

---

訳文中の割註のうち（ ）は原註、〔 〕は訳註を示す。



マリナー・ツヴェターエフ 工藤正広訳

## 光の驟雨

わたしの前にB・バステルナークの一冊の本《わが妹人生》がある。一目で、南部のただの配給紙や北部のけちな施し物を感じさせる保護色の装丁をして、煙のはだみたいで、居心地の悪く、何やら全体、喪の悲しみがかったあざだらけなのだけれども——、さりとて、この本、葬儀屋のカタログでもなし、或る息絶えかかっている出版社の起死回生、最後のぼくちでもないのだ。とは言え、わたしには、入手しても、一瞬にしてすぐに、開いてみるひまもないうちにそんなふうに、この本が見えたのであった。それから、わたしはこの本をもう閉じることがなかった。これはわたしの二日間のお客であり、わたしはこの本をベルリンのあらゆる空間を歩くのにも一緒に連れてあるいている。古典的なリンデン、魔法的な地下鉄（その本を手をしていると——どんな事故もない！）、そしてわたしは動物園に（知りあいになるため）その本を連れていったし、下宿の食事へも連れてゆき、そしてついには、胸の上にそれをひらいたまま——太陽の最初の光線とともに、わたしは目覚めるのだ。かくて、二日間ではない、——二年間だ！ この本について、三言語のべき、このなじみ古さゆえの時効の権利はある。

バステルナーク。けれどこのバステルナークとは何者か？（《芸術家の子息》——このことは外しておく。）イマジニストでもなし、さりとて何か或る\*イストでもなし……いずれにしろ新しい詩人のうちの一人だ……ああ、そうだ、エレンブルグは彼のことを力こぶいれて触れ回っている。そうです、しかし、あなた方はエレンブルグという人間の何たるかを、はたしてご存知かしら？ 彼の真直ぐで逆しまの反抗心を！ そしてどうやら、彼には今まで自分の本などというものが無さそうに見えるのだが……

いかにも、皆さん、これは彼の最初の本（一九一七年）なのです——そして示唆的ではないでしょうか。一九二七年に書かれるべき本がすでに一九一七年に消費されるというわれわれの時代にあつて、一九一七年に書かれたバステルナークのこの本がその五年後にあらわれるということは。そして何という本であることか！ 彼はさながら故意のように、はじめに、すべてのことを他の詩人たちみんなに語らせたのであった——それも最後の瞬間に、とまどいの仕草で彼が胸ポケットからメモノートを取りだして、《とところで、さて、ここに、このぼくがです、が……ただぼくは、ぜんぜん、じぶんを

保証できない、のであって……」と言うためなのである。パステルナークよ、どうかわたしを西欧に対する、あなたの保証人にさせてください——さしあたり——あなたの《人生》が当地にあらわれるまでのあいだは。わたしはご存知のように、じぶんの証明しようもない全資産でもって責任を負います。けれど、それというのも、あなたにそれが要だからではなくて、まったくの貪欲ゆえになの。つまり、そのような運命にかかわることが貴重なことなので。

わたしはパステルナークの詩を初めて読む。(エレンブルグから耳で聴いたことはあったけれども、わたしにも持ちまえの反抗心ゆえに——いや、神さまたちはわたしの揺かごの中に惜しみなく受け入れる愛の天賦を入れ忘れたのだ——太古からの嫉妬ゆえに、一度に二つのものを愛することが全くできないことのゆえに、わたしは小声でかたくなに固執した。《天才的な作品かも知れない、しかしわたしには不要だ》と)。パステルナークその人とわたしは殆んど、ちょっと目がしらであいさつする程度の知りあいだった。三、四回のそそくさとした出会いだ。そして殆んど無言の出会い、なぜならわたしは決して何ら新しいことを欲していないので。一度、他の詩人たちといっしょに、彼の朗読を、ポリテクニク博物館で聴いたことがあった。彼は冴えない音調で話し、殆んど詩行を全部ど忘れしているのだった。演壇上でその孤立のさまは、目に見えてブロークを想わせた。悩ましいばかりの緊張、の印象があつて、きき手は、進もうとしない乗物みたいにちよつと押してあげたかつた……《さあ、動け……》って、しかし、まったくひとことも言葉が

届かないものだから(なにかこうもぐもぐして、さながら熊が寝ざめたときそっくりで)、こらえかねて《おやおや、何だつてこんなにじぶんや他のひとたちを苦しめるんだらう!》とせつかな想いが浮ぶのだった。

パステルナークの外的な風采は素晴らしい。その顔には一度に何かアラビア人とその馬からくるものがあるのだ。つまり、注意深さ、耳をそばだてる緊張、そしていすぐにも……疾駆できる万全の用意。おおきな、馬のでもあるような、野生の、おずおずした、斜すに流れる目。(目ではなく、眼球だ。)いつでも何かに耳をじつとかたむけている感があり、絶えざる注意、そして突然——裂けるような発話、なによりもしばしば太古の何かあることがらに。まるで大岩か、あるいは解の木がしゃべりはじめたというふうだ。原始より沈黙たちの中断のようなことは(会話の中で)だ。いやいや、会話の中でだけではなく、その詩についても同然のことを、わたしははるかにおおきな経験の権利をもつて断言出来る。パステルナークは——樹木がその葉の明らかさによつてではなくその根(秘密)によつて生きているように——そのことはの中に生きているのではないのだ。この詩のぜんたいの下に——或るおおきな、クレムリンの道路の下に——静けさがある。

静けさよ、おまえはかつてぼくが耳にした  
ものすべての中でいちばん素晴らしい。

静寂たちの本であると同じほどに囁きたちの本なのである。  
さて今、彼の本(一連の打撃とその反動)について語りだす前に、

一言、その声を運ぶ電線について、つまり彼の詩才についてだ。思ふに、彼の、天賦の才は巨大だ、というのも巨大なその本質は全きまでに至りつくからだ。あきらかに、本質に等しい才能とは、けうの場合であり、奇蹟だ、というのも、詩人のいちいちの本のうえに、《これはどの才能をもつて……》あるいは《はるかにまれたが》《いずれにしろやはり何かしらびんと来る……》といった溜息があるのだから。いや、このことから神はバステルナークを、そしてバステルナークはわれわれを——おゆるしになったのだ。彼はユニークで分割できない存在。その詩は——彼の本質の公式である。ものの見事な《これしか他に方法なし》なのである。

《内容》に対する《形式》の、あるいは《形式》に対する《内容》の優位がありうるところに——そこにはかつて本質が夜泊したことは一度もないのだ。そして彼をまねることは出来ない。つまりまねられるのは、ただその衣裳だけ。彼のようにするには、二度生れなければなるまい。

バステルナークのボエジーの、証明されうところの宝（韻律、詩格その他）についてこんどは他の人々は言うだろう——それもきつと、わたしが彼の証明されえない宝について語るよりも、おとらないくらい感動をもつて。

それは詩のスペシャリストの方々のお仕事だ。わたしの専門は——人生だ。

\*

《Очень коротко》（わが妹人生！）——そのすべてを、つまり最初の一撃から最後の一撃まで耐えたのち、わたしの最初の動作は

——両腕をひろびろとあけはなったこと。関節がみんなかりか音をたてるよう。わたしは、それにつかまった、まるで驟雨にあったかのように。

驟雨。空ぜんたいが頭上に、垂直に。つまり驟雨はまっすぐに、驟雨は斜めに——さし貫いて、吹きぬけの風、光の雨の光線とのいさかい——かくて人は雨やどりするべきものなし。いったんそれに遇つたら——生えること！

光の驟雨。

\*

バステルナークは大詩人だ。彼は今誰よりも大きい。今ある詩人たちの大部分はすでに在った、或る詩人たちは今在る、彼ひとりだけが在るだろう。なぜなら、真に、彼はまだ存在していないのだから。つまり、わけのわからない片言、おしゃべり、がちやつく音、

——彼の一切が明日にある！ 幼児の早口な片言、そしてこの幼児が——その世界なのである。早口の片言。息切れのあえぎ。バステルナークはしゃべらない、彼にはしゃべりおえるひまがない、彼ゼンたいが張り裂けるのだ——あたかも胸におさまり切らないといったように。あ、ああ！と。われわれの言葉は彼はまだ知らない。すなわち、何か、鳥民のような・子供のような・エデンの園のような、理解できぬ言葉——ひっくりかえすところの言葉だ。三歳でこれはあたりまえであり、子供と呼ばれ、二十三歳でこれはあたりまえでなく、すなわち詩人と呼ばれるのである。（おお、平等よ、平等よ！ かかるバステルナーク一人を創造するために、第七番目の親族までさえも、いかほど多くを神は盗まなければならなかったこ

とか！)

われを忘れ、じぶんを憶えていない彼は、時おり不意に目覚めて、そしてそのとき、通風窓(人生の中——小文字の)へ頭をつきだして、しかし、おお奇蹟だ！三歳のこうごうしい頭のかわりに、マールブルグの哲学者の変人めいたナイト・キャップではないのか、ねばけ声で、屋根裏部屋の高みから外庭の子供たちにこう呼びかけるのは？——

可愛い君たち 戸外ではぼくらに

どんな千年祭があるんだい？

だじょうぶ、うけあってよいけれども、その応えは彼にはもはや聞えないのである。パステルナークの幼児性に戻ることにしよう。パステルナークが——幼児なのではない(なぜなら、その場合には彼は夜明けの中にはなく、四十歳の安息——すなわちあらゆるこの地上の子供たちの運命へと成長するだろうから)。パステルナークが幼児なのではなく、彼の内なる世界が幼児なのである。パステルナークその人を、わたしなら、むしろ天地創造のもっとも初めの数日に帰したい。最初の川、最初の曙、最初の雷雨の日々に。彼はアダム以前に創造されたのである。

わたしは、このわたしの無力なことはねちらかしから、ただ一つのことだけが、すなわちパステルナークの陽気さ、が理解されることを惧れてもいるのである。陽気さ、か。わたしはつくづく考えてみる。そう、爆発の、崩壊の、打撃の陽気さだ、あらゆる生の血管や力たちのもっとも純粹な放電だ、遠くから見ても——たんに

白紙の一頁と見まがうほどの、一種、白熱だ。

さらにわたしは考えてみる。パステルナークに無いものは何か？と。(なぜなら、彼の裡に全てがあるとしたら、彼は生であるだろうから、つまり彼自身は存在しないだろうからだ。否、の道を通つてのみ、然りの現存、つまり個別を確定できるのである。わたしは、じっと耳をかたむけてみる——と、重力の氣息というものだ！彼にとつて重力とは、ただ現実性の新しい形態——つまり、投げ落すこと、であるのだ。人にはむしろ、彼が、どこか雪に埋もれた小屋で雪崩の死の足音を見まもっているというよりは——雪崩を投げ落すもののように見える。つまり、あまりにも気短かで貪欲なので——自分でその中に突進してゆくのだ。額で、胸で、かたくなに抵抗し凌駕するものすべてで。パステルナークは盗まれえないのである。ペートーヴェンの *Durch Leiden—Freuden* (苦しみを通して——悦びを) である。

この本はレールモントフに捧げられている。(まるで兄弟に、なのか？) 暗闇に対するもの——光明だ。しぜんな引力だ。深淵への共通の志向だ。破滅することへの。パステルナークとレールモントフ。実の兄弟であつて、そして二つの翼の如くに別々に動いてゆくもの。

\*

パステルナークは最大の可浸透性の——したがって洞察力の詩人である。一切が彼にうち当る。(あきらかに不平等においてすら公正さが存する。すなわち唯一の詩人よ、貴方のおかげで天上の雷鳴からまぬがれているのは、ただ人間のドームひとりだけではないのだ！)。打撃があり——反動がある。そしてこの反動の電光石火、

そのすさまじい速度。すなわち、彼の全コーカサスの山々の千の重畳のこたまだ。理解するひまもなくてだ！

(ここから、しばしば最初の一瞬、いや最後の一瞬においてさえしばしば——われわれはとまどい迷わされるのだ。何なのだ？ 何事なのだ？ と、——しかし何事もない！ それは過ぎけり！ なのだ)

バステルナーク——これは明け放たれてある間断なき存在だ。すなわち、眼、鼻孔、耳、唇、手たちだ。彼の存在以前には何もものも存在しなかった。扉はことごとく蝶番から離れるのだ。人生の中へだ！そして、それと同時に任意の誰やらよりも、彼自身をより一層明るみに出す必要があるのだ。(陰謀のポエジーだ)。かくて、ひとは、バステルナークを、バステルナークに逆らって——ある新鮮な——もつとも新鮮な足跡をたどって、理解するのだ。稲妻のごとき光速の——彼は、経験の重荷を背負った全天のためにある。(嵐とは——空の唯一の吐く息であり、それは丁度、空とは——嵐が在り得る唯一の可能性、すなわち嵐の唯一の競技場であるのと同然なのだ。)

たまさか彼は顛倒させられる。すなわち、不意に開け放たれた扉の後で生の圧力は、彼の頑強な額よりもずっと強力なのだ。そのとき、彼は倒れるのである——法悦に満たされて——仰向けに。しかしこの顛倒性の中で彼は、この一瞬堡壘を越えて襲歩で、息をあえがせるポエジーからの全ての騎手や急使飛脚たちよりも活動的なのである。

\* 次の二つの事実の最後の瞬間においてだ。すなわち(1)《わが妹人生》

は決して彼の第一詩集ではないこと。(2)彼の第一詩集の名は《堡壘を越えて》に他ならぬこと——いずれにしろ、しかしこの堡壘は——《わが妹人生》中に採用されている。

そして照明。単に神々の寵児だからだ！そして——もつともけいがんな照明。いや違う、ただ単純にでもなく、また寵児でもないのだ！愛されぬ者の、かつてオリンポス山にオサ山をさらにベリオン山をつみ重ねて天にとどころとしたあの若者たちのうちの一人なのだから。

バステルナーク、すなわち浪費である。光の惜しみない流出だ。光の尽きざる流出だ。彼の裡に飢餓の年の法が実現する。貯えさえしなければ——余ることはないだろう、と。かくて、彼のことについては、われわれは安心だが、しかし、われわれ自身については、彼の本質を眼前にして、熟考できるわけなのだ。《彼はうけいれることができるのだもの——うけいれてもらおう》かしら？と。

でも、こうした早口の訥弁はたくさんだ。健やかに素面で試みることにしよう。(なにも怖れることはない。彼はもつとも白昼の光のもとに無事にとどまるだろうから！)。ついでながら、バステルナークのポエジーにおける光の要素について。光の記述(写真)。わたしはそう名づけたのだが。光明さの詩人(たとえば他の詩人た

ちが暗闇くらやみの、であると同じように」だ。光。永遠の勇氣だ。空間の中の光、運動の中の光、光の切り口（吹きぬけの風たち）、光の爆發、——ある種の光の饗宴だ。彼は光をはねかけられ、浸ひたされている。それまた単に太陽によってだけではない。光を發するもの全てによってだ——そして彼に、パステルナークにとっては、一切から光がやってくる。

かくして、夢見ごちの、これら解釈の渦巻きからさまたまにわたしは方途を立ててみて、結局——現いまの中に、幾つかの命題の素面の暗礁に至り、そして詩を引用しなければならぬ！

- 1 パステルナークと日常
- 2 パステルナークと日
- 3 パステルナークと雨

#### パステルナークと日常

日常ひごと。重たそうな言葉である。まるで、雄牛おしうし、とでも言ったところ。この言葉のあとに、遊牧民の、と続くとき、わたしは辛うじてこれに耐えられるのだ。日常、これは樫の木であって、この樫の木の下には（その円形中に）ベンチがあり、そのベンチには、昨日は孫であったところの祖父と、明日は祖父になるだろ孫とが腰かけているのである。日常の樫の木と樫の木の日常、といったところだ。丈夫で長もちがし、息がつまり、耐えがたいものだ。ひとは殆んど、この樫の木が、ゼウスに獻げられた樹として、他の樹よりもずっとしばしば、彼の寵愛、すなわち稲妻をうけるのだということを忘れている。かくて、わたしたちが、このことをとんと失念している、

その最終の瞬時にこそ、わたしたちの樫の木の額を撃つ稲妻となつて——救援にかけつけるのが、他ならぬバイロンであり、ハイネであり、パステルナークなのだ。

★

パステルナーク詩の連帯保障の鎖の中で、わたしたちを驚愕させる第一のものは、日常ひごと、である。その豊かさ、その詳細、そして——その《散文性》である。一日の特徴ばかりか、一時間の特徴もなのだ！

ばつと詩集のページをあけてみると——《デーモンの鎮魂に捧げて》である。

窓からただ一步のところで、

アラビア・マントの羊毛の翼を分けて

峰々の氷にかけて誓った——

眠れ、いとしいものよ、わたしは雪崩となつて戻ろう。

さらに、詩《わが妹人生》には——。

……ひと夕立あればその眼や芝草は藤色で

湿った木犀草の匂いに地平が匂うというのだから

そして、南部ロシア、カムイシン支線を旅し、

車室でぼくが列車の時刻表を読む五月に……

(わたしはわざと、これに付随した詩行を引用する。文脈をかためるためにだ。)

さらに、生垣について――。

なおもその画布は忘れ得ぬもの。

ほこりでこころもち腫れていたことよって、

風がヒマワリの種子をかじつてたべ

牛蒡<sup>ゴボウ</sup>たちに食いがらを捨て汚していたことよって

さらに、風について。

いちまいの風が薔薇の花を

ほんのすこし持ちあげようと試みる、

唇や髪の毛や履物<sup>くつ</sup>

裳裾<sup>えきす</sup>や呼び名に　せがまれて。

さらに、別荘<sup>ダイナマ</sup>について。

今はまだぼくらにとって森は――玄関<sup>げんかん</sup>のようだ、

縦の木のかけで月の炎熱は――暖炉<sup>だいろ</sup>のようだ、

まだやはり、きれいに洗われた前掛けのように

雨雲は乾きあがって、片言のおしゃべりをしている。

さらに、草原<sup>メーデー</sup>について。

霧は四方からぼくらを海のように奪い取った、  
薊<sup>アザミ</sup>のなかで長靴下のあとを追いながら……

ちよっと待って！　ここで、単語の選択はすべて、反復される音

《チャ》のためなのだ……しかし読者よ、あなたがたの誰にもこんなことが起こったためしがないだろうか。長靴下に咬みついてくる牛蒡<sup>ゴボウ</sup>の実が？　とりわけ、わたしたちだれもが短い靴下をはいていた子供時代にだ。いかにも、ここでは、牛蒡<sup>ゴボウ</sup>の実のかわりに、薊<sup>アザミ</sup>が使われているのである〔薊<sup>アザミ</sup>へ「まといつく」へ「長靴下の端には、それぞ。しかし、はたして《薊<sup>アザミ</sup>》の方がましでないというのだろうか？　(その本質がもつ、食欲さや、しつっこさや、棘のある点で?)

さらに。

下水樋<sup>くみ</sup>で、

湿った下着の袖のように、

木枝たちが死にざま感覚を失っていた。

(さらに同じ詩で)

外套のように濡れた

ほこりっぱい静けさの中で……

(これは詩《さらに息苦しい夜明け》である。わたしの手はここでこの詩をすっかり引用したくてうずうずしている。――全体に、詩

についてのこれらの考察なぞ千々に引き裂いて、詩集『わが妹人生』そのものをヨーロッパの本屋という本屋に出したくて、うずうずしているのと丁度同様にだ。でも、ああ、わたしの手は——そんなに多くないのなもの！

さらに。

製粉所には漁りの村の姿があり、  
白髪と網とコルヴェート船たち。

それから、喫茶店で。

けれども夜ごと夜ごとにもハエたちは流れてゆく  
一ダースから、二人前から、一人前の料理から、  
よじれたヒルガオから、  
詩人のもうろうとした詩集から。

これはまるでベンからたわごとが……

汽車でキエフに近づく際、

キエフのほとりで——砂地  
とほとばしり注がれるお茶、  
お茶は等級別にてかてかがやく  
熱い額たちに乾いてはりついた……

（とつくに汗にかわり乾きあがってしまったお茶。匠みに満ちたボエジ！《等級別にてかてかがやく》額たち——、三等車では一番うだるほどの暑さだ！この四行の中に、《パンを得んとて》のソヴィエトの一切がある。）

詩《わが家にて》

太陽からターバンが落ちかかる。

タオルをとりかえるべき刻

（バケツの底でくたくたになっている。）

市内では——電話の振動板のはなし声、

花壇だとかお人形さんだとかの擦り足の音。

さらに、眠れる臉について。

いとしい、死せる胸当て

そして脈うつこめかみ、

眠れ、スバルタの王妃よ、

朝はまだ早い、まだ湿っぽい

（臉。すなわち祝宴が埃にまみれないための、胸当てだ。つまり、  
眼の素晴らしい祝宴だ！）

さらに、詩《夏は》では、



小雨は扉のそばで足踏みし

そして葡萄酒のコルクの匂いがきこえた。

ああ かくもほこりの匂い。かくもブリヤン草の匂い。

そしていろいろなに分別するならば、

ひどく匂ったのだ 平等だの

友愛だのについての貴族たちの習字お手本が。

(若い葡萄酒の、すなわち雷雨の匂いだ！ここに《Sement du jeu de paume》(シェード・ボームの誓約<sup>(註)</sup>)のすべてがないであらうか？)

かくて、最後に、読者よ、パステルナークとその日常に対する謎の解がすべてであると見える最後の引用は、これだ。

そして井戸にむかって憂愁の竜巻が

裂けんばかりにもがくとき、そのとき通りすがりに

嵐はゆきとどいた家政を讀めあげる。

きみはさらに何が欲しいのですか？

いや、なんにも！ どうか、これ以上のものは、神じしん嵐から要求する権利をもっていないと見える！

さて、意味づけをしてみよう。日常の存在することは、証明されたと思われる。さて、では、その日常をどうすべきであらう？ むしろより正しくは、パステルナークはそれをどうしているのか、ま

た、日常は——パステルナークをどうしているのだろうか？ 第一に、パステルナークは、眼ざとく日常を見ている。つまり、捕えて、放つのである。パステルナークにとつての日常とは——歩みにとつての大地の如きものだ。瞬時の抑制とその脱離である。彼における日常とは(わたしの引用から確かめられたい)、殆んど常に、運動の中にある。すなわち、製粉所、客車、発酵しているワインの漂う匂い、受話器の振動板の話し、花壇の擦り音、ほとばしり注がれるお茶——わたしは附会しているわけじゃないのです！——確かめてごらんになって下さい。彼においては眠りさえ運動の中にある。脈搏つこめかみである。

不活発としての、家具としての、櫛の木(広告によれば、実にしばしば詩人たちによってパヴロフスクやエカテリノフカの紫壇にすり替えられる櫛の木造りのダイニング)としての日常なるものは——あなたがたは全然見いだすことはできないだろう。パステルナークの日常は、新鮮な大気上にある。べったり腰をすえたものではない。サドルにのつかったものである。

さて、彼の散文体について。この点について多くを語り得ようが——その散文体は炸裂するのだ！——しかし、わたしの内部からさらに激しく張り裂ける存在、すなわちパステルナークじしんに道を譲ることにしよう。

彼には見える、周りは婚礼の祝いだらけ

ひとびとは酔わせ、ひと寝入り目覚める、

この蛙一般の卵を、ひとを着飾らせて——

筋子と称しているのが。